博士論文要旨

論文題名：

高齢期の生活関係の形成と「生活力」

――農村地域の事例研究と高齢者のライフヒストリーの考察を通して――

立命館大学大学院社会学研究科
応用社会学専攻博士課程後期課程
池田（いけだ）　さおり

本論文は，高齢期の生活関係の形成について，生活構造の 4 つの要素――生活経済，生活空間，生活時間，生活関係――から考察し，さらに「生活力」という概念に着目して，生活における「条件」と「相互活動」を総合的に明らかにすることを目的としている．生活をトータルに捉える視角としての生活構造論と「生活力」について具体的に示すために，農村地域での参与観察およびインタビュー調査と，その地域で暮らす高齢者たちにライフヒストリー調査を行っている．

＜序＞では，「高齢化」とは何かということについて改めて問い直している．その際に，バルテスの「獲得と喪失のダイナミズム」という視点から，体力の衰えをはじめ，ネガティブな側面がクローズアップされがちな高齢化ではあるが，人間は年齢によってそのバランスの違いはあれど，誰もが「獲得と喪失のダイナミズム」の中にいることに着目し，これを「生活」全体にも当てはめて考えてみることを提起した．さらに日本を取り巻く高齢者の現状から，高齢化にともなう生活関係の変化について検討すること，その際に生活関係だけでなく生活の他の要素との関わりも含めて論じることの必要性についての述べた．

第 1 章では，日本における高齢化研究の動向について，①戦後から 1970 年代まで，②1980 年代から 1990 年代前半まで，③1990 年代後半以降の 3 つの時期に区分して検討を行った．①の時期においては高齢期あるいは高齢者問題の発見，②の時期においては来る高齢社会に向けてどのような対応を行うのか，③の 90 年代以降においては高齢者の生き方への着目，研究動向と社会の多様化・複雑化という特徴があるが，重要なのは個人としての高齢者と社会の双方を往復しながら論じていくことであり，そのために生活という視点に着目することを提起した．

第 2 章では，生活構造論についてその系譜とこれまでの研究動向について整理を行った上で，生活の様々な要素をトータルに捉えること，生活の動的把握，そして生活の中の具体的な活動について論じていくことの必要性について述べた．これらを展開するために飯田哲也の生活構造論と「生活力」概念に着目すること，それらを具体的に論じていく方法としてライフヒストリーを提起し，その有用性について示した．

第 3 章では，兵庫県洲本市中川原町に設立された＜中川原高齢者・障がい者地域ふれあ

いセンター＞（以下，＜ふれあいセンター＞とする）の事例を用いて，地域の「生活力」について論じた．洲本市や中川原町の概要，＜ふれあいセンター＞を共同運営する＜淡路ふくろうの郷＞と地域住民との関係，＜ふれあいセンター＞設立の経緯と，＜ふれあいセンター＞に関わる地域住民へのインタビュー調査を併せて，生活構造論の 4 つの要素と，地域の「生活力」について，その「力」の発揮を可能にする「条件」と，実際の発揮の形態である「相互活動」という視角を用いて考察した．

第 4 章では中川原町に暮らす 7 名のライフヒストリーの聞き取り調査を軸に，高齢期にある人々の「生活力」について，地域の「生活力」と同様に，生活構造の 4 つの要素と，「条件」と「相互活動」の総合としての「生活力」という視角を用いながら考察した．その際には社会全体の動向との関連も視野に入れるとともに，これまでの人生の「積み上げ」についても重視した．

第 5 章では，第 3 章で明らかにした地域の「生活力」と，第 4 章で示した高齢期にある人々の「生活力」について再整理を行うとともに，両者の相互作用について，バルテスの「獲得と喪失」および「選択的最適化とそれによる補償の理論」という視点も併用しつつ考察した．そこから，「生活力」を考える際には，生活を営む中での主体性の発揮が重要であることを示した．

終章では，高齢期を主体的に創造するということについて，その方向性を明確に示すために生活構造の 4 つの要素にしたがって整理・提起を行った．加えて，高齢期の主体的創造には自分の人生をどのように過ごすかということのみならず，自分がどのような家族・友人関係の中で，さらにはどのような地域・社会で生き切りたいのかも含めて考える必要があり，そのために昨今用いられている「自助・共助・公助」について，それらをバラバラに考えるのではなく，＜自助－共助－公助＞リンクという発想が必要であることを提起した．この提起の具体的展開ということに加え，本論文では不十分であった都市部の高齢者との比較研究，あるいは「前期高齢者」と「後期高齢者」の比較によってさらに「生活力」を理論的に深めていくことを今後の課題とした．